

あを

6

2013



江東区・中の島公園

何という無限に同感される絵であろう
これは炎のような手によって描かれたものだ

ヴァン・ゴッホ



Rembrandt
レンブラント
三本の木

ファブリ世界名画集
平凡社版より

あそ

六 月

三 葉 虫

佐 藤 喜 孝

夜櫻へ位置をたがへし庭箒

夜鳥と枕のあひだやへざくら

ゆく春の両手ひろげて寄する波

葉ざくらや三面鏡をひらくころ

笹舟の岸に寄りきし押しやりぬ

時古りぬ水の神社と蟬時雨

放射能のけぞってゐる三葉虫



『暖流』の先輩、亀田虎童子氏の近著を読んでゐる。虎童子氏は堀内一郎氏も属してゐた『萱』の代表である。

人声のあとに人影春の闇
人の上に人ありし世の亀鳴けり
つくしんぼ血を吐くほどの句のなかり
みちのくの地震が武蔵へ桜の芽
四五枚の葉に触れながら椿落つ
紙幣の顔みんな好きなり万愚節
老ゆる余地まだありて摘む路の臺
しやぼん玉一度吹かせてもらひけり
芹なづなひとつひとつに試歩の杖
言霊を叩へて来る春の鳥
いつもの箸いつもの椀の菜めしかな
紋白蝶涙をぬぐふ手のありや

氏は俳句は表現だとよく言はれた。どれだけ加へたら毀れるか、どこまで削れるかの名回答。しかし俳句は表現だけではないとも教へてくれる句集「春」の部の句である。

いぬふぐり

長崎桂子

しなやかさ常の心に枝垂梅

病院の跡地は住ひ八重桜

花万朶水面に映し水走る

懐かしき幼稚園なりいぬふぐり

土鋤けばゆるり寝そべるいぬふぐり

連翹忌ほんとの青い空何処

昭和の日常生活用具展示会

あぶらチャン

森 理 和

深呼吸水面を渡る若葉風

桜の実各駅停待つベンチ

囀や水平線に船沈む

鶯の時惜しむやう日の暮るる

蝌蚪の紐溶けて一尾は遠出せり

幼子の不意打つ眠り春の芝

ここからが登山道です油瀝青^{あぶらチャン}

私の住んでいる近くの十四川と言う小さな川の堤防は桜並木である。常日頃は自転車で買物の往き来に利用している。今年は例年より少し早く三月三十日より十日間が桜まつりになり、その間は多くの人出で自転車に乗るとなかなか進めないののでリュックを背負い歩く事になっている。明日は雨らしい前日の夕暮れには、東風になり食べ物を焼いたり煮たり食慾をそそる匂いが流れて来て、行き交う人も声高で騒がしく夜の遅くまで街中の様相である。

次の朝はコーヒーやジュースの空缶が庭に投げ入れてあり又ブロックの塀にちよこんと置いてあったりする。それを次の芥の収集に出す。やがて葉桜になり日陰と涼しい風をもたらしてくれる日を待ちわびる。

今年はバラが良く咲き続けています。数年前に京都市立植物園で購入しました。桃色の大輪で芳香を放つ一輪に魅了されて、後先も考慮せずに即決しました。『桃香』との出合いでした。帰宅後、枝に付いていた小さなラベルに「京成バラ園芸株」とあり、やれやれと思いました。

椿油の絞り滓で私は洗髪していますので、使用後の滓を植木鉢へ入れます。バラの土とこの滓が肥料です。「婆ちゃん、バラが咲いてるよ」と、孫が声を掛けてくれました。孫が気にかけてくれた事が嬉しくて、ますます大切に育てています。

八重山諸島行

吉成美代子

三線の深き音色に島の春

星あかりやもりの声の鳴きやまず

夜の星見つめる先にも青葉潮

由布島まで牛曳き渡る春の海

春なるも海に泳げるをのこたち

飛行機の春を突きぬけ夏の島

朱瓦を仰ぐシーサーあちこちに

★

吉弘恭子

散りしきし花を両手で宙にむけ

葩をうけて地の面はなやぎぬ

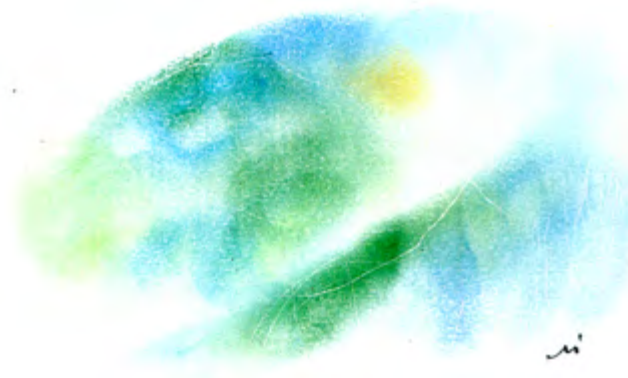
梅の実のふつくら結ぶ家解体

天空へ飛び交ふ雀はなびらと

葉櫻や請負業に遠図あり

徒雲のうしろにまはる春の月

徘徊る春の風吹く六本木



日 々

赤座典子

ふんはりと天蓋と咲く黄瑞香

諸葛菜の現れ消ゆる速さかな

塗り爪の剥がれてをりぬ花馬酔木

矢のやうに過ぎし女子会夜半の春

古時計気儘に鳴りて春闌ける

拘りしあれもこれもが臍の夜

春疾風色んなことがありすぎる

★

井上石動

伽羅の香のかすかや堂の五月闇

アカシアの花風のなか歩かうよ

根きり虫しんしん太る闇夜かな

葉先より名残の雨の新樹かな

あめんばを跨ぎあめんばあちら側

簾の先は万の若葉の揺れてをり

相州の富士へかむさる卯浪かな

四月下旬 やつと桜が咲きました
と越後湯沢の友人の新居に招待され
た。マンションの窓一杯に花が広
がっていた。ピンク色で 染井吉野
よりも 葉も花も大きく、紅山桜と
か大山桜と云つらしい。とても風の
強い日だったので、炬燵に入ったま
まのお花見と、地域情報を色々と教
わる、楽しい集いとなった。

翌日は暖かな快晴で、例年通り舞
子スキー場の辺りへ落の臺を探しに
出かけた。畦道でまだ開き切ってい
ないものが沢山取れた。
訪れる二日前迄雪が降り、桜の木
が白く覆われたという。それでも
所々に土筆が残り、連翹・木蓮も盛
りであつた。日陰の台地には、片栗
まで広がり、久々の湯沢で思いがけ
なく「北国の春」に出会えた。

兵共が夢の跡

「兵」は、どの本にも、そして多分昔
から「つはもの」と読んでいます。しか
し「もののふ・つはもの・武者・さむら
ひ・武士」ということは群があります。
さて、この芭蕉さんの句「もののふ共
かも知れないのでは?……」とフツと
あを代表と同じく「ある所」で思いまし
た。「もののふ」は万葉集に出ている言
葉。ただし表記は「物部」だから武人と
は限らない。「武者」は、遅くとも「保
元の乱」関係に出ている言葉。「武士」は、
西行さんが北面の武士。ただしこの「武
士」をなんと読んでいたのか?「さむら
ひ」は、「さむらふ者」だろうから、や
はり平安末か? さて「つはもの」も
古い言葉だが、どついつ意味合いが元な
のだろうか?言葉の本意としてそれぞれ
が、少しずつ意味合いが違つのでは?

吹けば飛ぶような俳句愛好者ではある
も、言葉をしっかりとつかいたい……と、身
の丈に合わぬ願いを抱いています。

「つはもの」の来歴が解つた晩に、あ
らためて「芭蕉さんはやつぱりス「ノイ」
と、再感動をしたいと思います。

風薫る

大日向幸江

夜の闇に白く浮びし花なりし

散りぎはに水鏡せる桜かな

茹で玉子するりとむけり花の下

タンポポの綿毛ふはふは病疲れ

鉄塔の頭を出して朧かな

金目鯛捌く腹より小海老出て

補助輪を外す時なり風薫る

さくら蕊

木村茂登子

ささくれを咎めしことも春愁

大寺の小さき佛や花まつり

春灯前座といへど独壇場

有終の美を根まはりにさくら蕊

菜の花忌今世に君がをりませば

牡丹を咲かせて留守の庭真昼

待たされてゐて若葉風ほしいまま

暫く姉の顔を見ておらず、退院後ふりと顔を見に行く事にした。仕事が一段落した金曜日の夜、新宿から私鉄に乗り一時間三十分、甘党の姉にデパ地下で今評判のみやげと、義兄には日本酒を買った。連絡もせず駅前のタクシーを利用しようと思っただ列の二人前の男が自分をじつと見ている。気がつかぬふりをして顔を背けると、二人前の男が自分の方に笑顔をしながら大声で「変らないね」と声をかけて来た。思いがけない挨拶に、頭の中に小学生だった頃が蘇る。「心の中で大声で男の名前を叫ぶ」一年生から四年生まで同じ組に居た。自分を苛めた男だ。「どこまで行くの、良かったら一緒にタクシーに乗ろう」と明るい笑顔で誘う。やがてタクシーの後部座席で二人並んで座った時、自分の頭の中にバカ明るいこの男への復讐心が燃え上がって来た。夜の闇の中にテールランプが良く合う。山間の町に小雨が車のフロントガラスを彩る夜だった。

稼ぐ生活から解放されて久しい、しかし毎日のんびりしているわけではない。一人暮らしでも家事の項目に変わりはない。毎日の掃除洗濯食事の他に通院がある。

月一度の内科、二度の眼科と整形外科、歯科は月に一度の大病院の専門外来と近くの診療所の三月に一度の検診と時により耳鼻科という次第。

又一人暮らしはつつかりすると食料を捨ててしまうことになるのでほとんど毎日少しずつ買うことにしている。幸いイトーヨーカ堂が近くにあるので助かるが、ものによっては川崎駅周辺まで出かける。さいか屋デパート駅ビル(アトレ)ラゾーナ等々ここが一番という品物があるのだ。ということで、私もなかなかいいのである。

★

齊藤裕子

柔らかに襞ほどけ初む木の芽かな

春嵐大樹に簾飛んで来た

げんげ田や靴脱ぎ捨てて鬼ごっこ

げんげ田に花摘む子等のランドセル

げんげ田や蹠ひんやり鬼ごっこ

若葉風光る眼や十二仏

石段のまろき窪みや春の寺

★

篠田純子

ゆるキャラにビニールかける春嵐

八重櫻撓む嵐の前の風

古ビルの中にガス燈春闌ける

新しきビルの裏蔭しやがの花

うなじ眩し若葉時雨の先斗町

河鹿鳴くなきやみてまたきよきよきよきよ

空海に悪筆のあり虫拂ひ

子供の頃、田植が始る迄の田圃は、私達の恰好の遊び場だった。春になると、れんげ草が咲いて、どこかの田圃もピンクの花で一面が覆われる。

学校帰りの友達と花を摘んだり、鬼ごっこをしたりして、よく遊んだものだ。走り廻ると、靴に泥やれんげ草の葉っぱの染みが付くので鬼ごっこの時は素足になった。花で覆われた田圃は平らに見えるが、花の下は地面は足跡がいっぱい。凸凹していて走り難い。滑った地面は素足にひんやりしていて、所々に水が溜っていたりした。

やがて、れんげ草を鋤き込んで田植の準備が始まる。山間の田圃はピンクから褐色、そして緑へと、景色を変えていった。

インターネットで光源氏の縁の寺があると知り、ゴールデンウィークに出掛けてみた。先ず境内にある湯豆腐「竹仙」で食事してから清涼寺を参詣する。ここは光源氏のモデルとなった源融の別荘だった所で、亡くなった後寺になったとの事。阿弥陀仏は生前の光の君（源融）の生きた写しと聞き、食い入るように拝見した。仏像にしては唇が小さく薄いように思えたが、やはり美男で逞しい。建立は平安前期八九六年。紫式部は、この像を見て源氏物語を構想したのではあるまいか。脇侍の観音勢至は藤壺と紫の上なのだろうか。菅原孝標の女がこの仏像を見たらたちまち虜になってしまった事だろう。

干しもの

定梶じょう

遙かまで馬柵の起伏の鳥曇

似たかほが三たりみると花ぐもり

あけぼのの山ぎは白み花杏

バケツにて飼うて亀まだ鳴かずけり

ひとり踏む干潟先立つ犬欲りつ

寄るべなく曲がつて蜷が道つくる

取り込むや干しものに蝶ついてくる

★

須賀敏子

落の臺少し刻んでスパゲティ

耕作を継がぬ畑に菜花咲く

歌舞伎座の柿落しや四月来る

桜蕊漂ひながらひとところ

春の山登ると冬に戻りけり

雨催片栗の花うつむいて

つつがなく鈴蘭咲いて誕生日

国語辞典を信奉する余り、そこにはない言葉は存在しない、とする方が意外に多い。かつて、角川『俳句』誌の合評のページに「光点」という言葉を遣った句がとりあげられて、この語は辞書にない、とひとりが発言してゐる。私手持の小型の辞書には「光点」が見出し項目にあり、大型辞典（本当は中型であるそうですが）のち『大辞林』『大辞泉』には収録されているが『広辞苑』にはない。合評会の発言者はどうも『広辞苑』の信奉者であるようだ。そしてそれに対して鼎談者の一人が「造語？」と心じている。勿論『広辞苑』が劣っているわけではない。収録語数二四万は他二書より多く、「光点」がない分他の語が収載されているわけだ。問題は、これら評者の、辞書を信ずる態度が素朴に過ぎやしないかということだが。

此の所、佐野洋子のエッセイにはまっている。あのロングセラーの絵本「一〇〇万回生きたねこ」の作者でありエッセイスト。すでに二〇一〇年十一月五日乳ガンのため七十二歳で亡くなっている。

その主張と文章は何とも小気味良く、読みながら心の中で「ふむふむ成程、その通り」と相槌を打っている自分がある。どれも同じような内容であるが、図書館へ行くと次々と借りてしまふ。

これから何年生きているか分らないが、潔く生きたい。そして生きている事を楽しみたい。

★

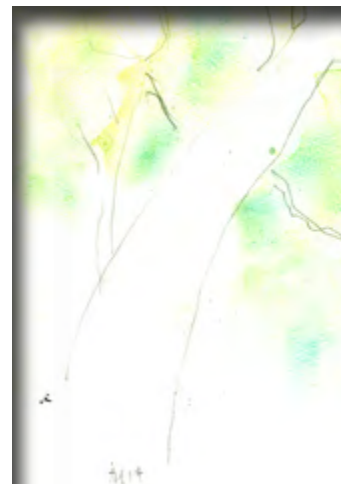
竹内弘子

砂日傘マレーネ、デイトリツヒの脚
遺失物の山の中なる吾が日傘
にんげんに會ひたくなき日の日傘さし
漱石の美禰子のやうな白日傘
花笠踊り繼子いじめのうたはるる
魚のごと寧楽の深山の茂り中
梧桐やおかぐらといふ二階建

鳥 帰 る

田 中 藤 穂

木の影の一日揺るる春障子
花祭ミサイル飛んでくる不安
夫と行きし旅のあれこれ西行忌
ステッキのすれちがひたり花の下
歩をゆるめをり花水木の舗道
帰る鳥見送る椎は動かざり
朝寝して今日人来るを思ひ出す



前号より

お手玉を四つ持ってとれる子は素
晴しかった。剣玉も面白い。弟のを
ちよと借りて、先っぱの剣に玉を入
れたり左右の血に乗せたり、紐のひ
き工合や腰の使い方にコツが要る。
ヨーヨーも面白い。小学校の手工の
時間にやった黍稗細工やひご細工、
ひごの繋ぎ目には茹でた豌豆豆を使
ったと思う。

夏休が来ると、朝早く起きて兄達
とその友達、私と弟で谷中の墓地へ
行く。あそこは大きな樹があつて、
兄はその中に樹液が出て虫の集る樹
を知っている。あの頃は兜虫や髪切
り虫、時には美しく光る玉虫などが
居て、それを見つけた時の胸の高鳴
りは今も忘れない。私の役は虫籠持
ち。でもあの頃の夏の日々の何と輝
いていたことが。

続く

花瓣と花瓣紅をたがへて紅薔薇 佐藤喜孝

臘梅や茶房店主の束ね髪 田中藤穂

児が駈ける中空に春兆しけり 長崎桂子

二羽三羽鴉の遊ぶ春の土 早崎泰江

ハモニカの音色は今も春の雲 森理和

歩けあるけ五臓六腑が春になる 吉弘恭子

人気無き住宅通り陽炎へる 赤座典子

たんぽゝは基壇ぎはまで國分寺 井上石動



校門は閉ざされしまま花盛り 木村茂登子

浅き春俳句を捻る手術中 斉藤裕子

春までよく生きたと泣けりヴァイオリン 篠田純子

猫の子になつかる金を借りにきて 定梶じょう

うららけし村営バスで岬まで 須賀敏子

葉桜やさらでも青き墓の径 竹内弘子

春の土耳傾ける薬師の目 篠田純子

喜孝抄



五月作品より

篠田純子・佐藤喜孝

鳥雲にハモニカの音遠くより

田中藤穂

一昨年、カフェ傳にて堀内 一郎さんのハモニカの演奏会があった。一郎さんは時々句会の終りなどにハモニカを披露して下さったが、その日の一郎さんの気合は違っていた。何本ものハモニカを吹きかけて本格的に曲を演奏して下さい。フォスターの曲が心に沁みた。もう聞くことは出来ないがいつでも心の中で甦らせることができる。〈純子〉



児が駆ける中空に春兆しけり

長崎桂子

広々とした空間をこどもが駆けまはつてゐる。そんな景をおもふ。それは「中空^{なかぞら}に」にある。その中空に春の兆しを覚える感覚は素晴らしい。「さんざめく子らゐて路地の春兆す」と比べればよく分る。〈喜孝〉

雛あられカラフル故に気後れて

長崎桂子

雛あられは桃色、黄色、緑色と着色されてとても綺麗。せんべいや饅頭のように地味な色合ならずかかと食べてしまうのに。気後れて、手を出せずにいる作者の様子が楽しい。〈純子〉

二羽三羽鴉の遊ぶ春の土

早崎泰江

犬猫も人間と同じやうに遊びが好きである。鳥の中でも鴉は頭の良きで人に恐れられてゐる。先日

井の頭動物園の歩いてゐる鹿の背中に鴉が乗って楽しんでゐるのを見た。掲句の鴉は二三羽で遊んでゐると作者は見た。鳥であるから枝の上ならともかく土の上で遊んでゐるのだ。「春の土」と遊んでゐるとも読める。〈喜孝〉

ふり向かず今を楽しむ桜かな

早崎泰江

様々の別れのあつたと思われる作者の一年。しかし季節は巡り桜は咲いた。「えーい、後ろ向きはやめて今の桜を楽しもう」と思う作者の割りきり方に好意を抱いた。〈純子〉

ハモニカの音色は今も春の雲

森理和

「鳥雲にハモニカの音遠くより 田中藤穂」と同じく、この句も堀内 一郎氏への追悼句である。両句の季語、「春の雲」「鳥雲に」は大いなる季語。

歩けあるけ五臓六腑が春になる

吉弘恭子

「となりのトトロ」の挿入歌の「あるこう あるこう わたしはげんき」という歌い出しの主題歌がスツと浮んできた。何ともほがらで元気な詠ひ出しの句である。厳しい冬を乗り越え春になった喜びをおのれの体と共有してゐる。歩け、という命令形は自身を叱咤激励してゐるのだ。若い時には浮はぬ発想である。〈喜孝〉

妙齢の赤い靴下春一番

吉弘恭子

この季語に仮託した両氏の追悼のこころは堀内 一郎氏の人格そのものとおもへる。〈喜孝〉

校門は閉ざされしまま花盛り

木村茂登子

世相を反映して、いつも開かれてゐた校門が、生徒の出入りの他は閉ざされてゐる。校庭の桜は花の盛り。この静かさはなんなのであらう。不安感の募る花の句である。〈喜孝〉

菜の花や父の単車は二人乗り

斉藤 裕子

私も父の股座でスクーターに乗っていた。父と二人の時間。父を独占していた。父に充分に愛された気持が、現在の心を安定させる。〈純子〉

猫の子になつかる金を借りにきて

定梶 じょう

出掛けた先の家で猫や犬に懷かれることがある。猫好きなら人間から愛想を振りまいて近づく。掲句は猫の子に注意を払ふ心境ではない。ないのだが懷いてきた子猫が憎からふはづはない。斉藤裕子さんの句に「浅き春俳句を捻る手術中」がある。実生活で自身や家族が病気になるたり、介護する家人があると、俳句どころではなくなる。こ

れは誰でも同じことである。私に初めて俳句との

対き合ひ方を教へてくれたのは、武井石艸岳人である。俳句は普段は、そんなに頑張らなくとも

よい。ここで作らなければといふ人生の場面にぶつかった時、力を出せるやう、普段努めてゐれば

よい。といふやうなことを再三再四教へられた。じょうさん・祐子さんの句を拝読して石艸岳人の

言葉を改めて思ひだした。〈喜孝〉

春の土耳傾ける薬師の目

篠田 純子

今月の特作は鎌倉での旅吟。

土牢を守る走り根花すみれ

初音よし谷渡り今稽古中

など古都鎌倉の風情が伝はる。特に注目したのは掲句である。薬師の目はものを見てゐない。聴覚に集中してゐると見える。薬師さまの目の表情がそのことを伝へてゐる。微妙な薬師様の表情を捉へた。春の土で野仏の風情のやうだ。〈喜孝〉

六月の旅線路とは錆びるもの

「萱」五月号で萱の創刊十周年を知った。目出度いことである。これは「暖流」解散時、会員の中に路頭に迷う人々の声が出て「萱」が出来たもので今日に到ったのである。十年続いたのは亀田虎童子代表の牽引力と執行部の献身的な努力のお陰である。お喜び申し上げる。私もこの十年、二度の手術を行い運良く命を取りとめた。泌尿器科は四月に五年経過放免され、外科は三年になるので飲み薬は不用になり後は「検査を待つばかり。弟が東一に病院、従つて私も現役にかえり句会など昼間の歩きはままならぬが、弟から仕事を恵まれたと思つてゐる。

先日町会の旅行で館林のつつじと「あしかがフラワーパーク」の藤の花を観賞してきた。翌日、萱の小島良子様から足利の萩原あや子様の逝去を知らされた。何故か因縁を感じてゐる。合掌。

二〇〇七・六・五

固まつてゐても言はず濃あぢさゐ

毎日新聞、坪内氏「季節だより」は昨年十二月十七日から始まった。私の知る石楠の白田亞浪も大野林火、篠原梵、金子麒麟草等そしてボルガの高島茂の作も出て来ない。

引用される人は何度も名を見せてゐる。芭蕉6・蕪村5・一茶3・子規5・虚子・0略・彼に好き嫌いはあるようだ。

弟の墓が決まり遺族が近くの原町の常泉寺に納骨することになった。偶然にも、うちのお得意様で、それも亡き弟が外交に訪問してゐた処であるし現在も仕事を頂いてゐる。

住職は私の保護司の先輩、久古教保先生である。納骨の七月二十日は亡父の祥月命日に当る仏縁であらう。

二〇〇八・六・二五

能登だより (4)

定梶じょう



町。

私の中学生当時夕方になると、遙かかなたの試射場上空。砲弾が赤熱してゆっくり飛んでいくのを、放課の教室から見たものでした。俳人の多い町でもありました。特に逢坂月央子という方の句には注目したものでした。当県の『ホトトギス』系の中では重鎮といっていた方で、同じく『ホトトギス』誌の同人であった私の次兄によると、温厚な方であったよし。

『ホトトギス』を手にとったことのない方のために少し説明をして置きますと、私が初めて手にした『ホトトギス』は、虚子の子息高浜年尾が主宰していて、投句者の句も概ね穏やかで素直、一句中に休止する部分もあつてめりはりのあるものでした。そのまま行けば私も『ホトトギス』に投句していたかもしれません。大学に入つて全く違つた句風に触れ、その機会はなく

すこし能登を外れます。金沢市の郊外とていい処に内灘町があります。基地反対闘争で有名になつた

なりました。

秋晴の無帽にも慣れ外出がち

高浜 年尾

こういう温良な句風が年尾の特徴ではありますが、それがまた他結社から貶められる因にもなつたのです。温良・穏やか何が悪い、と私なら思うのですが。

やがて高浜家の代替わりがあつて、年尾長女の稲畑汀子さんが主宰者になります。その辺りから『ホトトギス』の句形、句風がやや変つてきます。切れや休止がない、少々強引でも名詞止めにする、「もの」を据えることがなく「こと」だけで句を作る、等々。へ鶴の死を問はず語りに具さにもへ去年今年なく待ちうけてゐる仕事へ四月馬鹿ならば諦めつくものをへ。そして、いわゆる過去の助動詞「し」が多用されて、もちろん過去の意は一切ない。それを誤り、と言つていいものではありません。文語の調べが欲しいための使用でしょうから理解はしますが、鼻にはつく。へ梅開くけふの幕開け喜びしへへ暖冬は許さず雪の降つて来しへ

へ雪降らすことを忘れてをりし空へさからはず雪に住むこと身につきしへ……其處に來てぬし車の灯へ。もう止しにしますが、これが当県の『ホトトギス』同人その他の句なのです。石川県の俳人に限つて「し」の使用が多い、のではないこと言はずもがな。そんな中にあつて先ほど名を揚げた月央子さんはちよつと違つていた。

恙寝は旅寝にも似て霰降る

月央子

稲畑汀子選になつてからの句ですが、大凡『ホトトギス』にはこういう形の句は少ない「恙寝は旅寝にも似て」と言つたら「春の風邪」なんぞを取り合せて上五中七から離れることがないのが通例。成瀬正俊さんのような優れた方もいらつしやるので、一概にいうことは控えなければなりません、概ねそうです。

初みくじ凶や巷は雑踏す

正 俊

そして月央子さんも『ホトトギス』にありながらそ

うじゃなかった。年尾『ホトトギス』時代の句を拾うと、

夕刊がもう来てゐるや日脚伸び

月冷えの右手いたはる左の手

稿すこし進み新涼やや到り

バラ活けて王者の如く闘病す

竹内弘子さんの御作に

エジプトの女王のごとく朝寝せる

があります。『ホトトギス』にあつては「エジプトの女王」の措辞は想定外ではありません。その他新聞投句に入選した句から拾うと、

先代の先々代の紙衣かな

谷戸谷戸の芽吹かんとする静かなり

清潔といふは簡素に梅雨に処す

是好日雪吊など撈りし

立春の日のさしている吹雪かな

そして次の句についてはある思い出があります。

五月雨の一日中の大藁屋

月央子

私の知人に、作句はしないが読むことの好きな方がいて、ことに黛まどかさんのファン。たちどころに彼女の句を何句も口にすることができ。俳句を理解する力が相当程度あるわけです。

その方が掲句に関して今一つわからない処があるという。五月雨が大藁屋に降っているのであるが、「一日中の」が「大藁屋」に直接かかるように読めて、こういう表現が俳句では許されるのか、と。私は衝撃をうけました。何の惑いもなく佳句として読んでいたからです。いわれてみれば、

雛の日の誕生日なる漢かな

月央子

も同様かもしれません。

これらは偏に、助詞「の」を文語に読むか否かにか

かっているわけで、文語が頼れかかっている今、口語臭を厭わなければ「五月雨が一日中の大藁屋」でよかったです。俳句は文語で読むべし、という習慣が身についている人間には、あるいは頂門の一針だったかもしれません。以来私は「が」を積極的に遣うことを実行しているのですが、何かの書で黛まどかさんが「初心者にもわかる俳句」ということを仰有つていて、なるほどこれがそうか、と納得した次第でした。加賀、能登でここ数年の間に多くの俳人が亡くなりました。月央子さんについても、私の次兄が亡くなった今何の情報も得ることはできませんが、お元気であつて欲しいもの。

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊**俳句界** 2013年7月号

《特集》
俳号の由来
著名俳人俳号の謎

西東三鬼 相生垣瓜人 鈴木六林男
右城暮石 荻原井泉水 高濱虚子
飯田蛇笏 大橋桜坡子 中村草田男
上田五千石 星野麥丘人 倉橋羊村
古賀しづれ 河内静魚 稲田眸子
落合水尾 他

《カラーグラビア》俳句界NOW 高橋悦男
特別作品21句 鍵和田柚子

特集 **文学青年時代の私**
前田吐実男 佐藤麻績 大野鶴士 他
◆おとなのエッセイ 私の「黒歴史」
西村賢太 小嵐九八郎 道浦母都子 他
*セレクション結社「野の会」(幸・鈴木明)

私の一冊 石井いさお「煌星」

魅惑の俳人 **及川貞** インタビュー
根岸善雄

対談 佐高信の甘口で「コンニチハ」
渋井真帆 (作家)

※一部変更の可能性あります。

 株式会社**文学の森** 求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

獐 回 頭

高島茂 選評

逆絵を写す水田の千人針

石森和子

千人針は武運長久を祈願して、ひと針ずつ女の人の手によって成る出征するとき持っていた胸着である。植えてまもない稲の苗は、水田に千人針を結んだように列をつくって並ぶ。逆絵を写すは、こんもりとした丘であり、杉林であるかも知れない。五月の水田に植えたばかりの稲のありさまを千人針に見立てた手腕を買う。

(一九九四年七月)

油絵の暗きに浮ぶ瓜茄子

竹内弘子

さき頃、練馬区立美術館で「アメリカン・シーンの日本人画家たち展」を観た。清水登之・国吉康雄・石垣栄太郎・北川民次・野田英夫の五人の作品である。中に国吉の一九二五年に製作した『なす』という絵があった。室内のやゝ薄暗い卓上に丸い木皿があり、二つのナスが蒂と莖を揃えて垂下がるカーテンの縫りに、浮き出すようにある。カーテンの右側はあけはなされた町空の風景で、黒青色の家屋がありその上にセピア色の尖塔がある。雲は黒く、上部を示してあきらかに夕光である。国吉の絵は黒をよく使いこなした作品で、この句の「なす」は油絵の暗さに浮んだ「なす」である。弘子さんの作品を見て、すぐ国吉の『なす』を想い浮べた。瓜はなかったが、黒ずんだ褐色の木皿の上に二つの濃紺の『なす』。国吉の作品は油絵の暗さ(黒の主体)に浮んでくる風景や人物であり、静物であり「夢」のような作品である。

(一九九五年七月)

花袋忌のはや湯をつかふ乱れ籠

斧田綾子

田山花袋は明治五年(一八七二年)群馬県館林に生れているから、当時は栃木県、近代の文豪として名を連ねている徳田秋声・島崎藤村と同年である。昭和五年(一九三〇年)五十九才で死去。五月十三日が命日である。花袋・秋声・藤村は同年とみえてよく当時の写真に写っている。『重右衛門の最後』『蒲団』『百夜』『一兵卒の銃殺』などの花袋の作品は有名である。中でも『田舎教師』は特に好きである。俳句雑誌『ホトトギス』にも『野の道』『山の町まで』を載せている。晩年の写真は、あの足尾鉾毒事件を闘った不屈の人、田中正造を偲ぶような風貌である。若き頃はユーゴーの『レ・ミゼラブル』トルストイの『コサアク兵』などの翻訳をしている。その花袋忌にお風呂に入っているのである。はや湯をつかうというのは、未だ昏れやらぬ明るさにあるのであろうか。衣類を脱いで置くみだれ籠。作者は田山花袋の忌日に拘りつづけているようである。花袋忌の俳句は例句としてはほとんど無いといってよい。

(一九九五年七月)

吹き降りの水輪ひしめく花菖蒲

渡邊友七

白い花、紫の花や浅黄、赤、色絞りと菖蒲は多彩な花を見せる。菖蒲園などの田圃は、ひとつひとつ見応えのある立派な菖蒲を観せてくれる。吹き降りの雨の日の菖蒲園であろうか、菖蒲がいちめん咲いて、雨足は叩くように水面に水輪を立てている。雨の日の菖蒲の花もまたひとときわ趣があつて好いものである。

(一九九六年七月)

桜 通

吉 弘 恭 子

嘴に余る上枝や春の鳥
大岡越^{おおおか}前の立ちし石階手に温し
濃きうすき花片つまむ八重櫻
八重櫻木肌うるはし色見せて
葉櫻の蕊の色香を満喫す

花びらを追つてまぶしき宙見上ぐ
花びらを踏みて銀座へ有楽町
櫻蕊ほのとあかるき色のあり
下をむく八重櫻の色目にいたし
櫻散る木組確かや奉行所跡
散るさくら背に銀座の猫走る
三桎の花びら蒼しづかなり

あとがき

赤座典子さんと、井上石動さんはメールで投稿組。石動さんが原稿の添書に、「いよいよ、6月4日ですぞ。21・15過ぎに、放心安堵の美酒を飲む予定」とあった。今まではロスタイムでいつも苦汁を飲まされてゐた日本だが、この度はハラハラさせられたが見事W杯の出場権を手にした。私も正に放心安堵の美酒であった。数年前、甲府に遊んだ折にJ2のデーゲームを見に行った。この頭なので試合の仔細は忘れたが、サッカー場の外には桜が咲いているのが見え、その向うには山並が幾重にも重なり気分爽快で観戦した。デジカメで確か撮ったなとしらべたら二〇〇四年四月十日、どこでゲームをしたのか息子に聞いたらバレーのゐた大宮で甲府が負けたさうだ。私は小倉隆史を見にゆくのが目的。甲府で元気に駆けてゐるのをたのしんできた。

(喜孝)

五月二十八日、氷川神社へ吟行。竹内裕さんが全てを計画案内して下さり、句作りに専念できた。料理もビールも美味で是非もう一度あそこへ行かなくてはと思つてゐる。句会場は二十数階という筑波山からスカ

イツリーまでぐるりと見回せる絶景の場所。今歩いてきた参道や氷川神社が新樹で盛上がりはつきり確認できる。この会場だけでも句ができさうだ。句会がはね私はもう一度大樹を見たくて一人戻った。大樹を見るとなぜか心がやすらぐ。根元をよく見ると蟻が道を作つてゐる。樺大樹の根元から発した道は乾いた土の処を五十cmほどすすむとタンポポの根元にたどり着く。そこからは草むら、蟻の道は没して見えない。附録付の吟行であつた。(喜孝)

二〇一三年六月号

発行日 六月九日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090・9828・4244

ファックス 03・3371・4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130・655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。